

<1986>

- 自然に、自分に嘘はつけない
(早稲田高等学院ワンダーフォーゲル部「稜線」14号創部30周年記念誌)

自然に、自分に嘘はつけない

三十九年度卒 中井俊作

この想いをどう伝えたものだろう。一ヶ月半程の間、ずい分頭をひねったものだ。とうとうしばらく吸わなかったタバコを買いに出た。ショートホープひとつ百円。この百円をサイフから出すのをしばらくためらった。百円を得るためには20kgのパルプ材を切らねばならない。我家の食費は親子三人で日に百六十余円。月に五千円、年で六万の予算。この中には精米、精粉それに種苗の代金も含まれている。要するに食物に関してはほとんど自給自足なのだ。出来るだけお金を使いたくない。お金を得るために時間をとられたくない、無やみに自然を損いたくない。裏木戸を抜けて一分も下ればもう県道端の酒屋兼食料雑貨店だ。タバコの箱を胸のポケットに押し込み、その足で田んぼに向かう。歩いて2〜3分。道下の田には^点と厩肥の積んである所もあればもう水の張ってある所もある。四月の半ばにはもう早期米の田植えが始まるのだ。我家の田の畔に立つ。春雨一過、未だどんよりした空の下に菜の花は三分咲。種を厚まきした上に肥もやらずほつたらかしたから育ちは悪い。この分では今年も四ヶ月分位の菜種油が絞れば良い方だろう。その二百坪余りの田に踏み入って間

引きを兼ねて花芽を摘む。摘みながら又一しきり考え込む。

東京に生まれ育って22年、3年余勤めた製鉄会社を退き父の郷里、天草に移り住んで早14年。この天草には住居、田畑そして分不相応な山林が百五十ha余も残っていた。かつては村一番の地主の家だったのだ（山林に関しては「解放」されなかったから、面積では今でも村一番に違ひはない）。この家に「戻った」その年の暮、衆議院選挙に立候補して落選した。僕が26歳、S47年のことだった。肩ひじ張った言い方をするなら「今の世の中このままでは無事に21世紀を迎えることは出来っこない」という危機感が僕を政治の世界に駆立てたのだ。爺さんが戦時中に代議士を務めたという家の「過去」もあった。最大の支援者は親爺で、その親爺の人間関係の上に拵えた御コシに僕は乗った。保守王国熊本を政治風土の中で、郷に入らば郷に従えの選挙。五千万を越すお金が費された。僕の「危機感」は全くの一人相撲に終った。選挙の後始末が一段落したS50年、その親爺は脳溢血で急逝した。既に「家」に充分過ぎる程の負担をかけていた僕は兄弟に相続放棄を申し出、裸一貫から自分の人生を歩もうとしたが……

菜種の花芽を摘み、菜種の茎にからみ付くカラスノエンドウをむしりながら想う。人はカスミを食べては生きて行けない。如何程気のきいた事を言っても誰もが「己の口の奴隷」であることから逃れることはできない。この簡単な事実に正面から取組まない限り僕の気持は落着かなかった。落着かないのも当然だ。僕の危機感の源は小学生にも想像のつく単純な事柄だった。人口問題が

それだ。今の勢で人間が無節操に増加して行けば自分の生きていく内に食糧が間に合わなくなるだろう。数が増えるだけではない、マルサスも予想し得なかった環境破壊も進んでいるのだ。限られた食物を奪い合う様な事態に立ち至ったら。人間にとつては戦争こそがはびこり過ぎた「種」として迎える自然淘汰ということになるのだろうか。考えるだけでも馬鹿馬鹿しいが、この心配を果たして杞憂といつて済ましていられるだろうか？

人間が土地を「所有」するなどということは如何にもおこがましく、愚かしい。そう考えている僕が結局は天草の資産を相続するという皮肉なハメに落ち入った。兄も弟も天草に来たがらなかったのだ。一時は「解放」することや寄附することを考慮したが誰に何処をどの程度、となると答えが出しにくい。外材輸入、石油・プロパンの普及で山林の利用度は落ちていたし、山を「守る」意識も希薄になっていた。換金性でモノを計りがちな今の時代に急ぐことはない、僕は肚をくくって預ることにした。手元には現金がほとんどなかったから爺さんの代に育林した杉・檜の立木を売却して生活費にあてることになる。しかし伐期に至る程の立木は残り少なかった。それまで人手を頼んでいた山林の手入れは自分でする。その報酬として年間50万円を売上代の貯金から受取ることにした。これが僕の一年間の生活費財源だ。食物は自給。しかし片付けたい仕事^ひあつたから米・麦・豆作は一時棚上げとした。我家の田んぼを借りていた人からは借地料がわりにお米が届けられていたから飯米の心配はいらなかった。食事は玄米菜食を

基本とした。動物を飼うと家を離れにくくなるし、無用な殺生。野良仕事は避けられる、煩惱は抑えられる、それでいて健康は維持できる。何よりも僕のような「素人」に自給の達成しやすいメニューだった（この事は社会的にはイザという時の食糧政策に有効な指標となるだろう）。買物は原則として塩と油としょう油（手があいたら自分で仕込む）の三点。海草は浜に拾いに行くか物々交換。ラジオ・TVは情報源として活用するが、温水器は取外し冷蔵庫のプラグは抜いた。燃料は炭と薪が主でプロパンは従軽自動車のジープが一台あるが12年間で走行四万六千km程。要するに情報通信、交通運輸の便宜を除けば一昔前に近い生活としたのだ。僕にとつては望むところ、必要不可欠の「実験」であった。野面を五時のチャイムが渡って行く。左手には花芽がもう一杯。家に戻り机の前に座って頬杖をつく。程無く女房の顔が覗き、夕飯の仕度の途中ながら所用で外出すると言う。娘の遊ぶ土間に降り立つ。七輪の上の圧力釜を味噌汁鍋にかけ変える。里芋の皮をむき、摘んできた花芽に包丁を入れる。娘が背伸びして手元を追い、包丁の動きに合わせて「ザクザク」と声を掛ける。娘よ、お前には父さん母さんが「生きる」ことの基本を教えよう。太陽と空気と土と水さえあればこの広い地球のどこでも過ごせるように。15才になったら巣立つが良い。それから先、自らの巣を囲うようになるまでは人生ワンダリングだ。四日前、浜に打上がっていたワカメが軒下に下がっている。湿気を吸ってしとつてる。その一房が洗い桶の水の中。すくい上げてマナ板に。味噌は昨秋

仕込んだ新味噌と一昨年ものとを半々溶かし、お玉で味見。フーして娘にも一口。さあ御飯食べよう、上にあがりなさい。

「お母さんは？」と問う娘に答えて間もなく女房も戻ってきた。

親爺の亡くなった翌年、隣の本渡市（天草の中核都市）で市長選挙があった。告示の一週間程前、急に気持が傾いた。人を頼んで必要な書類を取寄せた。選挙公報の原稿は三日前に書き上げ、ポスター用の写真は二日前に撮影した。立候補の届出をするまでにその事を知っていたのは、前夜電話で会計責任者を依頼した人（書類を取りに行ってくれた人だが）だけだった。せめて天草位、生き残れる島にしたい、これが僕の想いであった。いわゆる選挙運動はすればする程情実・利害が絡みやすい。絡む程に人の心は離れ、協力は得にくくなる。法定期間だけ、納得のいく方法で、…初めは辻説法、途中からジープにスピーカーを乗せてハンドルを握った。ポスターは自分で貼り、自分でがした。手伝ってくれる人達もいた。開票の結果は現職市長が大差で五選され、僕は社共・共闘候補をわずかに上回って次点だった。供託金は戻ってきたので支出した選挙費用は20万円。一人よがりて人騒がせ、と言われればその通り。しかし先の選挙の反省を踏まえ、自分の姿勢を明らかにしたこの立候補は、その後の僕の歩み方を決定付ける上で重要だった。僕は踏切り板を蹴ったのだ。29才の春だった。

「あいつの事は放っておけ」、周囲の人も手を上げた。もうためらう事はない、僕は食物の自給自足自炊生活に全体重をかけて

踏み込む…と、いつか腰を据えた訳ではない。野良の合間に各地の「筋金入りの生活者」を尋ねてのワンダリングが3年。「有機農業」、「玄米正食」そして様々な住民運動の縁が道標となった。勿論、背には食糧と寝袋。出かける度に冷汗をかき、野良と台所に戻っては目が醒めた。僕はそれまでの自分が如何に「東京の眼鏡」をかけていたかを思い知らされる。「生活」の当事者にならない、そしてなれない「東京発」のワンダラー。

百聞は一見に如かず、百見は一行に如かず…いよいよ米作りに取組んだ。牛馬の代りに中古の耕運機で耕しはするものの、後は種まき、苗代作りから脱穀、貯蔵に至るまで人力作業。農薬や化学肥料等も用いない。そうしなければ自分達の口にするものを得るのに、肉体的にどれ程の負荷がかかるのか「正味」のところからわからない。初めから機械や化学製品に頼っていたらその有用性も評価できない。一度は一貫して手仕事でやってみなければ、自分が見えない「社会が見えない」。歩み始めた生活は「形容詞のいらぬ」、生活だった。それが辛ければ「今までサボっていた」という事であり、しくじれば「次からは気を付けよ」という事だった。僕は矯正された。顔付きも変わってきた。生きる事の重さ、生活の見当がついてきて親になる自信の様なもの湧いてきた。いきさつを記すと長くなる…一年共に暮らして様子を確かめ合った連れを入籍した。長い「渡り」から「営巣」へ、35才になる年だった。翌S57年夏、僕は自宅で長女をとりあげ、ヘソの緒を結んだ。

お天道様はお見通し、因果応報は間違いない。はびこり過ぎた人間は一体どれ程の報いを受けることになるのだろう。果たして僕の心配は杞憂に終わってくれるだろうか。野良に立ち、足元が見える様になるにつれ心配の種は増すばかりだった。かつて巧みに自然と共生し、自給自足度の高かった「百姓」は、農業専門家”に変わり、減った作目、増えた耕地に対して化学肥料、農薬を多用、商品作物作りに精を出す。食物の量は増し、マルサスの予測は外れたかに映るが実態は何のことはない、石油と機械そして第三世界の多数の「汗」の産物だ。品種改良の「成果」も素直には喜べない。出回る食物の質は間違いなく悪化した。生態系も悪化の一途。TVの画面を追うとランドサットの衛星画像は示してくれる。農耕地はさしづめ青カビ、都市・工業地帯は赤カビといったところ。かつての青カビは自然と共生し得たが最近のものはそうでもない。赤カビの方は言うまでもない。その繁殖力はますます旺盛、菌糸は伸びる一方だ。所詮、人間の作り上げる「文明」なるものは興っては亡ぶものなのか。僕達の生きるこの文明では「科学技術」の用いられ方が變を握っているだろう。用いる人間社会に節度があるかどうかにかかっているのだ。社会の節度を見るには「恵まれた者」の振る舞い方を見れば良い。「既得権」にしがみついた人がある限りその社会に節度など期待できない。人々は文明の果実を要領良くつまみ食いしたがるばかりだ……

足元の実態、自分の正体を知る程、そして「人類」という種の「なり振り」に気付く程自然の美しさを讀えたり「平和」とか「民

主々義」という言葉を用いるのが恥ずかしくなった。一人一人の人間をとってみればそれなりの事情と背景を負って精一杯やっている。しかし大方の人はほとんど無自覚のまま科学技術の「成果」を振り回しているのだ。だから全体としては人間の近視眼的都合が優先され過ぎて環境が損われる。僕は思う。自然と相補共生する関係の中で「自立」を果たすことの重さを実感しない限り、科学技術の成果を正当に利用する意識など生まれ難い、と。だから僕は今、人々の中に眠る「自然回帰」と「自立」の本能に希望を託している。専ら食べる人、専ら作る人に分かれ、甘んじている限りそのところは見えてくるまい。お天道様を見上げて野良に立てば、「人心地」を得るはずだ……

6本目の煙草に火をつける頃、障子が青白んできた。10本目のタバコが灰になる頃、下書きを終えた。清書にかかって更に二日を費した。もうタバコは買いにしなかつた。

（現役諸君に一言）

「東京の眼鏡」を外せなければ「東京の眼鏡」をかけていても意味がない。「眼鏡」を外す最良の方法は恵まれていると自覚した分だけ荷を負うことだ。そして僕は恵まれていて、この時代に生まれ合わせたということだけでも既に君達は恵まれている。自然あつての生活、生活あつての分業。今その大本のところ、怪しくなっている。